

中村素堂

後年「三楽書道会」という書道団体を気の合った人々と結成して、都立美術館での展覧会でもこの席上揮毫をやり、私どものような青二歳にもこの席上揮毫の番が廻ってきた。

身様見まねで、何とか書き馴れたものだけを書いていたが、この書道会の創立時の会長さんは、この間九十歳でお亡くなりになった詩人堀口大学先生の父君で、特命全權大使・公使などをされた堀口九万一という何とも瀟洒な紳士であった。

モーニングの似合う細作りの顔にはキラリと光る鼻眼鏡をかけておられた。どう見ても第一級の外交官と見えるスタイルの人が好んでこの会場にあらわれて、私が席上で書くのを前に立って紙を引っぱって下さったり、出来たものを後ろへ乾かして下さる。大勢の人物の人々がああ青二歳が紋付、羽織、白足袋で何かごまかしながら、鼻眼鏡の老紳士を使つて紙を引っぱらせている光景は書きものより珍奇に映つたらしい。

その時分、鼻眼鏡を鼻の上のせているのは、洋行堀りか活弁と無声映画の声色をやる弁士とか、まあ私も知つた顔では佐藤春夫などというキザがかつた人だったのに、この前大使は漢文漢詩が相当読めて、この時分には源氏物語に没頭して研究中というご仁であった。何かの話のついでに「この詩はどう読むの」なんていわれるので、大要青二歳子は苦勞し、後年読めぬもの意味不明のものは和漢とも絶対に書かぬようになったのは、堀口先生がご自身では知らないことだが有り難いご教訓となった。

話が少し先へ飛びすぎてしまつたが、ついでに今日になるとおもしろい思い出をもうひとつ。この第一回三楽書道展は会長が堀口先生、この外に後援者の中には政界の黒幕とか無冠の大臣とかいわれた頭

山満先生、剣道の中山博道先生など、随分翰墨とはすぐに結びつかない名士の方々があつたので、美術館でも特別にスペースを提供して下さるのに、同志の筆頭若海方舟先生はひと通りでない変わり者で、やるとなつたらやる——というゴリ押しで宣伝不足で作品も不足なのにたちまち第一回展を開催することに話をつけてしまつた。だから看板では全国書道展と銘を打つても、全会場を充たす数には達しなかつた。そこで方舟先生名案があると、どこへどう交渉したのか、幕末明治初期の画家河鍋晩齋という人の描いた長さ十六尺(三十数メートル)という襦褌一ばいに、ありとあらゆるお化けの図を借りてきて、空いている室へずーっと張り廻してしまつた。

どうして書道展にお化けが出るのかと、方々から質問がくる。しかしまあ筆法をご覧下さい、あれだけの活きた線というものは、並大抵の画家の描けるものではない。ひとつ目小僧の眼が熟視できますか、あのロクロ首の二間も三間もある線の迫力はどうです。私は画家だからというのではないが、これだけの線は書道の鍛錬の外には絶対に描けるものではない。こういう書画一致の姿をお目にかけて、書といえはオムツのように同じ大きさのお清書を列べるのでは芸はない。今後のこの世界に貢献する資料を展示したいと期しているのだと、爽やかだったかどうか、吹きに吹いた。

しかし第二回展となると、あの穴うめはあまり感心しないとなつて、私が蒐めた中国名碑の原拓を全部陳列し、その中央に中国の大地図を掲げて、碑名年代一覽の大きな表を作り、絹糸の紅・黄・緑・白などで、標示の碑名から地図へ連絡して碑の所在地を展示して見せたのは、大変な手数を要したが、これは穴うめ感を露出しないうですみ、第三回には作品増加でこんな苦しみを全くしなくてすむようになった。その最も大きな原因は飯島春敬先生ご門下の大量な出品作に因るものであつた。(つづく)

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

〔書紀〕昭和五十六年